

ルカによる福音書 21 章

「やもめの献金は 200 円」

- 1 イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。
- 2 そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、
- 3 言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。
- 4 あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

大変興味深いお話です。

世の中ではなかなか通用しないお話かもしれません。

金持ちたちの献金よりも、貧しいやもめのレプトン銀貨 2 枚(約 200 円) のほうが「たくさん入れた」と言われているからです。

さて、どう理解したら良いのでしょうか。

イスラエルにおける大きなお祭り、過越の祭りの最中の出来事です。

神殿は礼拝者でごった返していたと思います。

そして、大勢の人たちが賽銭箱に献金していました。

最初神殿には賽銭箱はなかったと言われていますが、紀元前 9 世紀頃からは賽銭箱、献金箱が置かれるようになりました。

人々はやってきて、そこに感謝と礼拝の心を添えて献金を捧げたのです。

会計面から考えれば、献金額は多ければ多いほど神殿を介しての働きのために有効だったでしょう。

しかし、根源的なことを見れば神殿税は

イエス様の時代には 20 歳以上の男子が、貧富の別なく一律に年額 半シケルを納めるものでした。

その根拠とされたのは、出エジプト記 30 章 11~16 の規定です。

古代では、2 デナリが 1 シケルと考えられていたようですが 1 デナリは 1 日分の日当ですから二日分で 1 シケルということになります。その半分が神殿税として成人男子には課せられていたわけです。時代によってこの価値は変化していますので、ある説では、イエス様の当時はその二倍だったのではないかとされています。それでも 1 日分です。

そしてこの神殿税は年額です。

収穫の 10 分の 1 を捧げる 10 分の 1 税というのもありました。しかしこれはお金ではなく農作物での捧げ物でした。相続地が与えられていない祭司のレビ人たちの生活を維持するようにと律法によって要求されていました。そのおかげでレビ人たちは、国民の霊的な面での必要を満たす活動に打ち込むことができました。

さらに生活困窮者、貧しいやもめ、みなしごたちの支援のために用いられました。

それに加えて任意の献金が捧げられました。

さらに、イエス様の時代にはローマに対する税金もありましたから、生活面では大変だったと思います。

+

「お金持ちの献金と貧しいやもめの献金」

いずれにしても、神様への感謝と礼拝の心に満ちた献金は大切なものです。

しかし、イエス様は。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。

4あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」と語りました。

これはどういう意味でしょう。

「有り余る財の中からの献金」と「赤字生活の中からの献金」といえば

精神論としては、それは赤字生活の中からの献金した人は偉いということになるのかもしれませんが。

でも、イエス様は本当にそう教えているのでしょうか。

他者からは有り余る中からの献金と言われていても、当人にとってはこれが精一杯と考えていたかもしれませんし、わたしほど高額な献金をするものは他にはいないだろうと感じていたかもしれません。

その人の心はわかりません。

でも、はっきりしていることがあります。

「お金持ち」には、その生活姿勢の中に「頼れるもの」がいくつも育っていく可能性があります。

例えば、お金、信用、頼れる人、依頼できる人、周囲からの評判などは、お金持ちが「神様だけを信頼しなくても大丈夫」という空気を心に持ちやすい素材となっているでしょう。

一方、このやもめは、常に赤字生活、困窮生活にあえいでいました。

それでも、かろうじて、人からの支援を受け、礼拝を捧げるために神殿にやってきて感謝と礼拝の献金をしたのです。その額 200 円。

イエス様はその人をみて「この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。

4あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

と語りました。

つまり、彼女は日常的に困窮していて余裕もなく、頼れるつてもほとんどなく「持っている生活費がレプトン銅貨 2 枚。(200 円程度)」

でも、それを献金したのです。彼女にしてみれば、自分のいのちをそのまま神様に預けるような気持ちで捧げたと思います。

そこにこのやもめの「すごさ」があります。

自分の中に、神様以外にいくところがない、という状況の中で淡々と

「神様にその信仰姿勢を表明している」からです。

この人は、「もう、どうにでもなれ」という気持ちで捧げたわけではないと思います。それは自暴自棄ですから、お金は持っていてもらわないと困ります。

私たちの生活に照らして考えてみましょう。

わたしはこの物語を読みながら創世記1章と2章の初めの部分を重ねていました。神様が天地をお造りになり、人間を創造し「非常に良かった」と喜び、7番目の日を聖なる日と定め、安息されたという記事です。

こう書かれています。

1 天地万物は完成された。 2 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。 3 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

神様は創造のわざを休まれて安息されたとあります。

作られた一つ一つのを喜び、心踊らせ、安息されたのです。

被造物からの神様への礼拝を受けた日のようにさえ感じます。

被造物は神様に創造され、生かされていることを喜び、そのことで心がいっぱいになっていたと思います。

その被造物の喜びの表明こそ、神様の安息につながるのだらうと思ったのです。

私たちが、先週一週間振り返って、月曜日、火曜日、水曜日、木曜日・・・

と1日、1日の生活の中で味わった神様の恵みを数え、神様からの助けを思い出し、決してリッチではなかったし、良いことばかりではなかったけれど、神様への感謝の心は絶やさずに、信頼できるのは神様だけです、よろしくお願いします、と必死に生きてきて、礼拝に参加し、感謝して礼拝し、献金するという姿勢と

仕事に明け暮れ、神様に生かされていることは頭ではわかっているけれど祈ることも、み言葉を思い巡らすこともせず、忙しく人を使い、心を物と出来事にいっぱいになっている人が、礼拝にやってきて、あ、そうだと取り出す献金と、金額の違いはあるにしても、その献金の背後にある生き方が違いますよね。

ただし、これは説教者が非難したり、牧師が苦言を呈する内容ではありません。あなたと神様との関わり方の問題ですから。自分なりに一生懸命やったけれど、そんなに毎日聖書の言葉に触れることはできませんでした、という方もおられるでしょう。神様は、そういうあなたの全てをご存知です。ただ、神様をあてにして生きるということ、神様があなたの命と存在の根底を支えてくださっていることに意識を向け、それを土台に礼拝し感謝を捧げているか、その部分が問われているのです。

わたしは、牧師として皆さんの献金、奉仕、励ましに心から感謝しています。そして、神様は皆さんの捧げ物を喜び礼拝の心を喜んでおられると

思います。ただ、自らが神様との姿勢を吟味し、このやもめのあり方や献金額を軽蔑してこなかったか。他者の献金額を羨ましく思ってこなかったか、あるいは自分の献金額を誇りにしてこなかったか。

そもそも、献金の競争をしてこなかったかを振り返っていただけたらと思います。献金はまったくの任意です。競争はまったく不要です。

礼拝と献金を通して「心が晴れ晴れ」しているかどうか。

「やっぱり、あの献金、お釣りをもらっておけばよかった」という気持ちになっていないかどうか。献金は捧げる前からの準備も必要ですね。

神様は、あなたの心からの奉仕、礼拝、献金、存在そのものを喜んでくださいます。感謝をもって礼拝し、感謝をもって自らを神様に受け取っていただく、という姿勢が大切なことなのです。赤字続きの人生だとしても、です。

何があっても、なくても、何を持っていても、持っていなくても、神様に生かされ、愛されているわたしがここにいる、その事実に関心と意識をしっかりと向けることができますように。

MACF 礼拝映像はこちらです

<https://youtu.be/EkSmOrV3MVw>